

3章 年中行事にみる日本人の宗教生活の変容

一 年中行事の変容

石井研士

我々の生活の中に織り込まれ、生活に区切りと季節感を与える年中行事も、近年はずいぶんと変化してきたように思われる。クリスマスはすっかり日本人の年中行事として定着したし⁽¹⁾、聖バレンタインデーやホワイトデーも若者を中心に幅広い年代層に広がっているように思われる⁽²⁾。ギフトマーケティングでは、ビジネスチャンスとして、その他にもハロウィンやイースター、セクレタリデーやボスデー、あるいはサンジョルディの日など、本来日本の年中行事にはなかった行事が列挙されている⁽³⁾。こうした本来日本にはなかった年中行事が浸透したためであろうか、近年では「七夕」を「ラブ・スターズ・デー」と称して宣伝するデパートも現れている⁽⁴⁾。

他方初詣やお盆など、いくつかの伝統的な年中行事は現在も盛んに行われている。日本人の宗教に

関する世論調査では、初詣やお盆、あるいはお彼岸への常に高い関与度が示されている。しかしながら我々の生活様式は、戦後、とくに高度経済成長期以降大きく変化したものではなかっただろうか。正月やお盆の過ごし方も、我々の親やそのまた親の時代とはずいぶんと変わってきているように思われるのである。本章では、現在都市で行われている年中行事の分析を通して、日本人の宗教生活の変化と現状を、限られた資料からではあるが、できるだけ客観的に考察してみたいと思う。

柳田國男監修の『民俗学辞典』（一九四九年、東京堂）に記載されている「年中行事」の項目を見ると、年中行事は「年々同じ暦時がくれば、同じ様式の習慣的な営みが繰り返されるような伝承的行事を言う」と定義されている^①。そしてここでいう年中行事は、ただ個人が年々歳々繰り返すだけではなく、「家庭や村落・民族など、とにかく或る集団」ことにしきたりとして共通に営まれるものである。それゆえに年中行事は、当該の集団に行事の実践を強制する拘束力を持っていることになる。人々は一年間の生産過程、とくに農耕生活の折り目や節目に「日常態を区切って、正月・盆・節供その他のように、平常のなりわいを休んで特殊な行事を行う」のである。年中行事は明らかに社会の節目であって、ケガレを断った「ハレ」の日であると『民俗学辞典』には記されている。

『民俗学辞典』の「年中行事」の指摘はたいへん興味深いが、このようなものとして「年中行事」を見てくると、私が冒頭で指摘したような、現在都市を中心に行われている「年中行事」と民俗学で対象としてきた年中行事の間にはかなりの距離があるように思われる。

これまで日本人の一生（通過儀礼）や年中行事に関する研究は、民俗学を中心に行われてきたとい

っていいだろう。これら行事の個別の調査研究報告から、全体的な構造分析まで、実にさまざまな研究成果が出されている。しかしながら、こうした民俗学の文献を読むと、私はいつも違和感を感じざるをえなかった。というのは、正月やお盆をはじめとしてさまざまな年中行事が詳細に説明されている、私はそうした行事を実際に行ったことはないからである。研究文献によってそうした行事の存在と意味を知ることではできても、私の実生活においては無縁なものである。ましてや一九六〇年代後半以降に生まれた今の若者は、民俗学が説明する年中行事をもっと行っていないし知らないに違いない。つまり、民俗学という通過儀礼や年中行事に基づく分析は、過去の、少なくとも現在の東京ではほとんど行われていない儀礼や行事を基になされたものであって、現在の都市民の世界観や靈魂観を解き明かすためには現在都市で行われている年中行事の解明が必要なのではないかと思われるのである(6)。

「あなたは信仰を持っていますか」などの質問に対して、「信仰あり」と明確に意思表示する日本人は、どの調査でもおおよそ三割ほどとなっている(7)。自分たちは欧米人と比較して宗教的な国民ではないというのが日本人一般の常識であろうと考えられるが、宗教学をはじめとする隣接学問は、具体的な宗教行動や宗教意識からみると日本人もかなりの程度宗教的であることを明らかにしてきた(8)。お宮参りや七五三、結婚式や葬式といった通過儀礼、あるいは初詣、バレンタイン、お彼岸、お盆、クリスマスといった年中行事に見られる宗教行動に関しては、きわめて高い関与の割合が示されている。NHK放送世論調査所編『日本人の宗教意識』(日本放送出版協会、一九八四年)は、「初

詣」「節分の豆まき」「お盆やお彼岸の墓参り」「クリスマス・ケーキ」などの年中行事を宗教的行事とした上で、アンケート調査によってそれらの行事の実施率を調べ、「かなり多くの日本人は、年中行事としての宗教的な行動を行っている」としている⁽⁹⁾。柳川啓一・阿部美哉編『宗教理論と宗教史』においても、日本人の宗教性を表すものとして宗教的な年中行事への関与が指摘されている⁽¹⁰⁾。また宮家準は「生活の中の宗教」として年中行事を取り上げている⁽¹¹⁾。

しかしながら、私は、いま一度、年中行事に関する常識を疑ってかかりたいと思っている。民俗学で説明されるような年中行事のうちどの行事が現在も行われ、どの行事が廃れてしまったのか。産業構造や生活構造が大きく変わる中で、どのような新しい年中行事が生み出され、年中行事の全体的な構造はどのように変化したと考えられるのか。そして、初詣に出かける恋人たち、バレンタインデーのためにチョコレート売り場に殺到する女性、クリスマスに贈物をするために開店前からティファニーのネックレスを求めて行列する若者は、どのような意味で宗教的と考えられるか。年中行事の宗教性を考察することによって、現代日本人の宗教性を考察してみたいと思う。

二 変貌する年中行事

年中行事の変貌を考える上で、いま一度民俗学における年中行事の性格を『民俗学辞典』を参考にして確認しておきたいと思う。つまり、年中行事は年々繰り返される伝承的行事であること、拘束力

を持った集団行事であること、季節感をともなった社会の節目であること、集団の「ハレ」の日であること、の四点である。

戦後、特に高度経済成長期以降の都市化や産業化による生活構造の変化や生活意識の変容は、これまで民俗学が年中行事を成立させてきた母体を壊し続けてきたものではなかっただろうか。たとえば、民俗学が年中行事の分析の基礎におく拘束力を持った村落共同体としての農村は、産業構造の変化にもなつて解体したことが多くの研究者によって指摘されている⁽¹²⁾。都市化はたんなる生態学的な変化だけでなく、新しい生活構造や生活様式をもたらしした。そして、こうした変化の結果、日本人の意識構造も著しく変容したことを多くの研究が明らかにしている⁽¹³⁾。

それではどのようにしたら、どのような年中行事が現在、とくに都市において行われているかを知ることができるだろうか。残念ながら現在日本人が行っている年中行事に関する詳細な調査報告はないように思われる。しかしながら分析のための手がかりがないわけではない。さまざまな機関が行った世論調査の中に年中行事に関する質問が含まれていることがある。これら年中行事に関する質問を抜き出して、概要を把握する努力をしてみたいと思う。個々の質問に設けられている年中行事は必ずしも一致しているわけではなく、また地域的な特性をも考慮する必要がある。異なった調査の質問に設けられた年中行事の実施率を単純に比較することはできないが、それでもおおよそ現状を把握することは可能である。

世論調査の対象区域を東京に限定し、実施年の早い順に三つの世論調査の質問と結果を見ることに

しよう。

都市生活に関する世論調査（東京都都民生活局、一九七九年十二月）（14）

初詣に行く

六五・三

門松をたてかけたりおそなえをかざる

五一・八

豆まきをする

六七・四

お彼岸にはお墓参りをしたりおはぎ・ぼたもちをそなえる

六六・三

ひな祭りの人形を飾ったり、こいのぼりをたてる

四六・七

花見に行く

三五・二

しょうぶ湯に入る

三三・〇

虫ぼしや衣がえを欠かさずやる

五〇・二

七夕のかざりをつくる

二四・六

初ガツオ・土用のうなぎ・マツタケなど季節のものをたべる

四五・二

初午・酉の市・お不動様・その他決まった日にお詣りにいく

二〇・三

お祝いごとがあるとお赤飯をたく

四三・二

祝日には日の丸の旗をたてる

一〇・一

十五夜にすすきやお団子を用意して月見をする

二〇・一

年末には大掃除やすすきはらいをする

八四・七

年越しそばをたべる

八三・八

いずれもしない

〇・九

わからない

〇・三

文化に関する北区区民意識調査（東京都北区、一九八八年一〇月）⁽¹⁵⁾

初詣

七〇・二

七草がゆ

二一・九

節分

五七・六

ひな祭り

三八・九

お花見

三七・二

端午の節句

二六・六

七夕

一七・三

十五夜

一四・〇

クリスマス

五九・八

誕生日祝い

六八・三

その他

五・〇

何もしていない

七・一

計（M・T）

四二三・九

家庭に関する世論調査（東京都情報連絡室、一九八九年二月）⁽¹⁶⁾

子供の誕生日のお祝い

五九・九

親もしくは祖父母の誕生日のお祝い

三七・二

結婚記念日の夫婦間のお祝い

二八・八

クリスマス、子供の日などの家族でのお祝い

五六・〇

家族内でよいことがあった時（入学・卒業・就職など）

のホームパーティー

四四・九

友人を招いてのホームパーティー

一六・八

お彼岸、命日などのお墓参り

六一・九

お正月、お盆などに親族が集まること

六二・四

その他

三・二

無回答

二・九

計（M・T）

三七四・〇

「都市生活に関する世論調査」の項目を実施率の高い順に、実施率五〇%を目安にして列挙すると、「年末の大掃除やすすはらい」「年越しそば」「豆まき」「お彼岸のお墓参り」「初詣」「門松」「虫ぼしや衣がえ」の七行事となる。同様に「文化に関する北区区民意識調査」では、「初詣」「誕生祝い」「クリスマス」「節分」となる。また、「家庭に関する世論調査」では、「お正月、お盆などに親族が集まること」「お彼岸、命日などのお墓参り」「子供の誕生日」「クリスマス、子供の日などの家庭でのお祝い」の順となる(17)。

調査時期、調査対象、調査目的、調査方法、調査項目など、それぞれの調査は異なっていて単純な比較はできないが、いくつか共通する事実を指摘することができる。第一には、「大掃除」や「年越

表1 大学生に対する年中行事調査

	やっている	やっていない		
		かつては やった	やったこと はない	聞いたこと もない
1月				
大正月(正月)	93.8	4.0	0.9	0.4
七日正月	28.4	13.8	44.9	9.3
小正月	19.6	8.9	55.6	10.2
2月				
初朔日	3.1	0.9	25.3	68.0
節分	57.3	40.4	2.2	—
事八日	1.8	—	16.0	79.6
バレンタインデー	56.9	22.2	10.2	1.3
社日	2.2	—	12.0	82.7
春彼岸	53.3	9.8	23.6	11.6
3月				
ひなまつり	39.1	42.7	16.9	0.4
ホワイトデー	41.8	22.2	24.4	1.8
イースター	5.3	10.2	56.0	17.8
4月				
卯月八日	1.3	0.4	30.2	65.8
花祭り	8.0	12.0	43.6	32.9
5月				
端午の節句	24.4	53.8	20.0	1.3
母の日	70.2	20.9	6.2	0.4
6月				
氷の朔日	0.9	—	10.2	87.1
水神祭	2.7	0.9	32.4	62.2
夏越の駈	14.7	2.2	20.4	59.6
7月				
七夕	35.1	63.6	1.3	—
お盆	73.3	12.9	10.8	—
8月				
八朔	1.3	—	26.7	70.2
穂掛祭	2.2	0.4	22.2	74.2
9月				
オクンチ	0.4	1.8	34.2	60.4
10月				
収穫祭	6.2	4.9	57.8	28.4
ハロウィン	12.9	10.2	58.7	3.6
11月				
七五三	11.6	81.3	6.2	—
女の家	0.9	—	11.6	84.4
新嘗祭	12.9	1.3	68.4	11.6
大師講	1.8	0.9	28.4	66.2
12月				
川没りの朔日	0.9	—	11.6	85.3
事八日	1.3	—	17.8	78.7
すす取り正月	3.6	6.7	33.8	52.9
クリスマス	82.2	10.2	2.7	—
大赦	53.8	4.4	26.2	8.9

しそば」などの年末の行事、「門松やおそなえ」といった正月の準備や「初詣」をはじめとした正月に行われる行事は、どの調査においても高い実施率を示しているという点である。「クリスマス」も年末の行事に含めて考えることができる。第二に、年末年始の行事に対する人々の感心は現在でもきわめて高いものと考えることができる。第二に、年末年始の行事の他で実施率の高い行事に先祖供養と結びついた「お盆」や「お彼岸」の行事を挙げることができる。第三に、それ以外の年中行事で実施率の高い行事に「節分」「誕生日」がある。「誕生日」は個人によって日が異なっており、民俗学における年中行事の定義からすれば年中行事の範疇には入らないものと考えられるが、実施率はきわめて高い。いまだ少し上記の結果を確認する意味からも、別の調査結果を見ることにしたい。

現在、若者がどのような年中行事を、誰と行っているかを明らかにすることを目的として一九九〇年一二月にアンケート調査を実施した(表1参照)。アンケートは、都内のキリスト教系の女子大学と私の所属する私立大学の二校の学生を対象に行い、二二五通の回答を得た⁽¹⁸⁾。

一覧表に挙げた年中行事の中で、五〇%以上の実施率で行われている行事を、割合の高い順番に列挙すると、「大正月(正月)(九三・八%)」「クリスマス(八二・二%)」「お盆(七三・七%)」「母の日(七〇・二%)」「節分(五七・三%)」「バレンタインデー(五六・九%)」「大祓(五三・八%)」「春彼岸(五三・三%)」の八行事となる。この調査においても、クリスマスを含めた年末年始の行事と祖先崇拝に関係する行事の実施率は高くなっている。その他この調査では、「母の日」と「バレンタインデー」の実施率の高さが注目されるが、両行事ともに若者中心の行事といっていだらう⁽¹⁹⁾。

表2 重要な年中行事

第一位		第二位		第三位	
順位	回答数	順位	回答数	順位	回答数
1 正月	78	1 クリスマス	42	1 クリスマス	24
2 クリスマス	36	2 正月	26	2 お盆	22
3 大祓	8	3 お盆	22	3 バレンタイン	14
4 お盆	7	4 バレンタイン	14	4 正月	13
5 誕生日	2	5 お彼岸	6	5 大祓	11
6 七夕	1	5 大祓	6	6 母の日	7
6 イースター	1	7 ホワイトデー	4	7 七夕	6
		8 イースター	3	7 誕生日	6
		8 母の日	3	9 お彼岸	5
		10 七夕	2	10 花祭り	3
		10 ひな祭り	2	11 ハロウィン	2
		12 お月見	1	11 節分	2
		12 始業式	1	12 ホワイトデー	1
		12 成道会	1	12 冬至	1
		12 節分	1	12 クルブスギル ナイト	1
		12 オクンチ	1	12 涅槃会	1
		12 父の日	1		

さて、行われていない「死んでいる」行事にはどのようなものがあるだろうか。これまでに「聞いたこともない」と回答した割合が五割を超える行事が一五行事あった。季節順に列举すると、「初朔日」「事八日」「社日」「卯月八日」「氷の朔日」「水神祭」「夏越の祓」「八朔」「穂掛祭」「オクンチ」「女の家」「大師講」「川浸りの朔日」「事八日」「すす取り正月」となる。若者はこれらの行事をたんに「やったことがない」、つまりかつてはやったことがあるけれども今はやっていないでもなければ、聞いたことはあるけれどもやったことはないのでもない。これまでに見たことも「聞いたこともない」のである。そしてこの一五行事のうち「夏越しの祓」を除くと、残り一四行

事の「聞いたこともない」と「やったことはない」の回答の合計の割合は九割を超えている。

いまひとつこのアンケート調査では、自己記入方式で自分にとって重要な年中行事を三つ順番に挙げてもらった（「あなたにとって重要な年中行事を順番に三つ挙げて下さい」。それぞれの順位ごとに列挙された行事を見ると表2のようになる）。

調査対象となった学生にとって重要な行事の第一位では、「正月」と「クリスマス」が圧倒的に多かった。「クリスマス」は重要な行事の第二位第三位にも高い頻度で示されている。その他に多くなっている行事には、「お盆」「バレンタイン」「お彼岸」「誕生日」「七夕」がある。

このようにみると、若者にとっても年末年始の行事は重要であり、他に恋人や友人との行事、そして自分の誕生日を行っているということになる。

私の行った簡単なアンケート調査からも、いくつか興味深い点が明らかにになる。まず第一に、民俗学が年中行事として分析の中心に置くようなものの大半は、都市で生活する若者からは脱落しているという点である。こうした行事は主として農耕儀礼を背景に、村落共同体において行われていたものであり、村のような共同体が崩壊した、第三次産業を主とするような都市においては、当然ながらそうした行事は見たことも「聞いたこともない」という状況が生まれてくる。

第二に、現在若者が行っている行事の中に、いくつか伝統的な行事が見られるが、そうした行事は、内容からいっても他の行事との関係の上からも伝統的な行事とは大きく異なっているのではないか、ということである。七五三や花祭り、あるいは端午の節句などは、子供中心のまつりであっても、基

本的には村全体のまつりであった。今回のアンケートで、「誰とやっているか」を尋ねた結果を見ると、七五三では「家族」と、花祭りでは「友人・知人」と行うという回答割合が圧倒的に高く、行事によって異なった集団を母体にして行事が行われていることがわかる。

第三に、現在行われている行事の中に、海外から輸入された、新しい行事が少なくないということがある。「クリスマス」や「バレンタイン」の実施率の高さからも明らかのように、こうした行事は若者の間にすっかり定着し、大きな重要性を占めていると考えることができる。そして、知名度の高い行事として先に挙げた「ハロウィン」や「イースター」もこうしたグループに含めて考えることができるだろう(20)。

三 年中行事の構造

これまで、現在行われている年中行事がどのようなものであるかを知るために、いくつかの世論調査をはじめとした客観的なデータを引用し、分析を試みてきたが、一年間のサイクルの中で今一度現在行われている年中行事を考察してみると、いくつか重要な点を指摘することができる。まず第一に気づかれるのは、節目となる年中行事の数が、これまで民俗学によって明らかにされてきた年中行事と比較して、極端に少なくなっているという点である。そして第二には、もしクリスマスやバレンタインも一連の年末年始の行事と考えることができるかとすれば、現在行われている年中行事は年末年始

とお盆の時期に集中していることになる。こうした年中行事の構造をどのように理解すればよいのだろうか。

民俗学が年中行事を総体として捉える場合に、年中行事の一年両分性、あるいは二重構造が指摘されることがある。「正月」と「お盆」の対応をはじめとして多くの重要な行事が半年をへだてて対応しているとする考え方である。そしてこの半年を隔てた諸行事の対置の代表とされるのが「正月」と「お盆」である。田中宣一は「正月」と「お盆」の類似対応を、元旦と釜蓋朔日、小正月と盂蘭盆会などの期日の対応、松迎えと盆花迎え、年神棚と盆棚などの施設や用具の対応、祖霊としての年神と祖霊としての精霊などの意識されている神格の対応の三つに分けて考えている⁽²⁾。

しかしながらこうした「正月」や「お盆」の対応をそのまま現在の都市においても見ることはできるのだろうか。詳細な調査が行われていないために、明確に結論づけることはできないが、「正月」と「お盆」の行い方がまったく変わってしまったために、もはや期日の対応を見ることはできないだろうと考えられる。次に、当然ながらそれらの行事を行うための施設や用具も大きく変化しているに違いない。私的な印象にとどまるが、都市においては年神棚や盆棚を設ける家はきわめてわずかであらうし、その結果正月に祖霊を招いて祀る家も極端に少ないだろうと考えられるのである。我々にとって「正月」や「お盆」の意味は大きく変化したのではないだろうか。

人々が正月をどのような期間として位置づけているかを、都市の事例ではないが、見ることにしたい。

「あなたにとって年末年始はどのような期間にあたりますか」(時事通信社、一九八九年二月) 22

家でのんびり骨休めの機会

四一・〇

ふだん会えない親せきや友人との懇親の機会

一九・八

帰省の機会

五・二

スキーや温泉、海外旅行などに出かける機会

二・七

時間を気にせず遊べる機会

五・四

家事や来客で忙しい期間

一五・五

仕事や商売で忙しい期間

四・八

その他

〇・九

どれとはいえない・わからない

四・六

上記の調査は、時事通信社が一九八九年一二月に行った全国世論調査の結果である。この調査は民俗学で調査してきたような正月の過ごし方とその変化を念頭において行われたものではないが、それでもいくつかの重要な点を知ることができる。「家でのんびり骨休めの機会」が圧倒的に多いように、この世論調査の結果からすれば、なによりも正月は休息の期間ということになる。現在一般的な勤め人の年末年始の休みは、官公庁の休暇に合わせてほぼ一二月二九日から一月三日となっている。大企業ではいまだ少し休暇期間は長いようであるが、それでも大きな相違はないものと考えられる。そしてこの短い期間に掃除を終え、「ふだん会えない親せきや友人との懇親の機会」や「家事や来客で忙しい期間」を過ごしながら休息をとるのである。

正月はハレの日であり、特別な食事を食べる機会であるといわれる。民俗学の指摘によれば、正月のハレの食事を作るのは男性であり、若水汲みなどの儀礼を順に踏み、食する必要がある。しかしながら、どれくらいの人々がこうした習慣を踏襲しているのだろうか。毎日新聞社が行った「食生活」に関する世論調査によれば⁽²³⁾、自宅でお正月のおせち料理やお彼岸のおはぎなど伝統的行事と結びつけた料理を作る人の割合は七四％になっている。七四％という数値が高いのか低いのか安易に判断できないが、調査の結果からすれば、四人に一人が料理を作っていないことも明らかにになっている。そして料理を作らない理由は伝統的料理がもはや儀礼的食事の意味を失っていることをうかがわせるものである。

「食生活」に関する世論調査（毎日新聞社、一九八九年十二月）

〈伝統的行事と結び付いた料理〉（％）

よくつくる

四一

ときどきつくる

三三

あまりつくらない

一五

ほとんどつくらない

一〇

無回答

一

〈つくらない理由〉（％）

つくりかたがわからない

一〇

買った方が安い

二九

家族が食べない	二九
つくる暇がない	二三
手間がかかる	三〇
伝統的行事をしない	一一
その他	一〇
無回答	二

また新聞報道によれば（朝日新聞、一九九〇年十二月三十一日）、デパートでおせち料理のセットの売れ行きがこの五年ほどの間に急激に伸びたという。デパートの担当者話として、共働き夫婦が増えたこと、作り方を知らない人が増えたこと、そして雰囲気重視の風潮があることが背景にあると述べられている。依然として正月に特別な料理を食べる習慣は我々日本人の間に広く残っていると考えられるが、それでもその意味は従来の正月料理とは大きく異なっていることをうかがうことができるだろう。

それでは正月は、日本人にとってどのような意味を担った時期として受け止められているのだろうか。この点を、いくつかの事例をもとに考察してみたいと思う。

年の代わる大晦日の夜にNHKでは毎年「ゆく年くる年」を放映している。多くの日本人がこの番組を視聴していると考えられるが、「ゆく年くる年」は基本的に同じ番組構成で放映され続けているのである。一年の終わる最後の一分五秒間にはリレー中継で次々と寺院が映し出される。前半の一分

間に神社の映像が流されることはほとんどない。そして零時の時報を境に、アナウンサーの「あけましておめでとうございます」の声とともに映像は切り代わり神社の姿が映し出される。この放送パターンは基本的に変化していない。

「ゆく年くる年」の前半一五分に、寺院ばかりが現れ、除夜の鐘が鳴らし続けられることによって我々に伝えられるイメージや雰囲気は「死」ではないだろうか。除夜の鐘が鳴らし続けられるからといって、我々日本人が「煩惱」に関する信仰や知識を持ち合せているとは思えない。鐘の音はあくまでも「お寺らしさ」を伝えるための装置である。そして、後半の一五分間で繰り返し送られてくる神社の映像は、新たな「生」を意味しているのではないだろうか。我々多忙な都市民は、一年の「終わり」という時に、お寺に象徴される「死」を通して自分の「終わり」死を体験するのではないかと。そして、新しい年の「始まり」に、「生育や産育」を象徴する神社の映像によって自らの「始まり」生もしくは「再生」を体験するのではないか。放送パターンが維持されているのは、番組制作のイニシアチブがNHKではなく、視聴者つまり我々日本人にあることを物語っている⁽²⁴⁾。

そして、このように考えてくると、なぜ明治神宮に多くの人が初詣に出かけるかを理解することができる。警察庁発表によれば、一九九二年の三が日の初詣者数は約八二五九万人で、前年に比べて五一七万人の増加となった。明治神宮に参拝した初詣者数は三六〇万人で、全国一の参拝者であった。今でこそ明治神宮は、全国一の初詣者を集める神社であるが、明治神宮は以前から初詣者数が最も多かったわけではない。初詣者数が日本一になったのは一九八〇年からのことである。なぜ明治神宮は

一九八〇年から初詣者数のトップに着き、以後二位以下との差が大きく開いたのだろうか。

都市化にともなう東京への人口の集中が明治神宮の初詣者数を押し上げたとか、交通網の発展整備によるものだ、とは簡単にいえないだろう。というのは、そうした恩恵を同様に被っているはずの東京の他の神社の初詣者数は必ずしも増えていないからである。むしろ、ごく一部の神社を除いて神社は初詣者数を減少させているのである。むしろ明治神宮の初詣者数の顕著な増加は、他の神社の初詣者数の伸びなやみや減少の上に成立していると考えた方がより事実に近いのではないかと思われる²⁶。

それでは、なぜ他の神社ではなく、明治神宮に四〇〇万人近い初詣者が集まるのだろうか。待たされることの嫌いな都市民が、明治神宮の社頭へ行くまでの混雑をどうしてじっと我慢できるのだろうか。人口増加が直接に各神社の初詣者数に反映しないとすれば、また交通機関の発達が明治神宮にだけ有利に働いたのではないとすれば、原因は明治神宮そのものに求められなければならないだろう。私の目下の結論は、明治神宮が都市民の新年の「再生」に深くかわっているのではないか、というものである。明治神宮は、明治天皇と照憲皇后を祀る神社であり、大正年間に設けられた神社である。しかしながら、渋谷の地に三〇万坪に及ぶ広大な境内地を有し、その社は古代から自生していたかの感を抱かせる。鳥居によって明確に聖なる領域と俗なる領域が峻別され、参道に敷かれた玉砂利は、効率よく短時間で目的地に到達することを強いる現代社会を拒絶している。我々は広大な緑の中へ一歩一歩吸い込まれていくことによって、俗なる空間から身を引き離し、聖なる世界へと入っていくことになる。共同体が崩壊したために、共同体全体の聖化が不可能であるとすれば、個人や家族は自ら

の努力によって聖なる領域を捜し生命の更新を行わなければならない。明治神宮はそのための空間を都市民に提供していると考えすることはできないだろうか。

民俗学では、正月は「生命の更新を祝う春の行事」であると説明する。都市での正月も同様に生命の更新として考えることができるだろう。しかしながら、「大正月は歳神の来臨を迎えての靈魂の更新に重点」（柳田國男編『民俗学事典』一九五一年）があるという分析は、もはや都市の正月には適応できないだろう。我々都市民は歳神を招く装置を持っていないが、それは歳神を成立させている構造自体を失っているためである。都市民の生活を構造的に規定しているのは、農耕ではなく情報であろう。濃密な共同体を喪失した都市民が、それでも個人、家族、社会を維持していこうとするのであれば、疲弊したそれらを更新させる儀礼が必要である。私には、大都市における大規模な神社への初詣の集中は、都市民が聖なる時を体験させてくれる儀礼をマスメディアを通して凝視し、都市の中に聖なる空間を捜し求めている結果であるように思える。

四 おわりに

これまでみてきたように、現在行われている年中行事は、民俗学が扱ってきたものと大きく異なっていることがわかる。まず第一に、現在は個々人が帰属する会社、学校、クラブや家庭などそれぞれの集団ごとにさまざまな行事が独立性を持って行われており、これまでのように年中行事の一覧を作

り、日本人の世界観や靈魂観を一律かつ体系的に説明できるかどうか疑問がある。もはや特定の年中行事を特定の様式に則って行うことは、かつての「村」のように強制されることがない。たとえ所属する集団によって強制される行事があるとしても、それは基本的にはボランティアなものである。しかしながら同時に、以上のような強制力とは質的に異なりながらも、やはり強制力を持って日本人一般に年中行事が強いられているのも確かである。年代や所属集団によって、それぞれ祝い方は異なるとしても、クリスマスやお正月は日本人が共通して行う重大な年中行事である。

第二に、私の行ったアンケート調査から明らかになった、現在都市において行われている年中行事は、伝統的な年中行事に、現在若者を中心に広く行われているだろうと考えられる行事を加えたものであった。その結果、多くの伝統行事は脱落していることがわかったが、このことは今回は取り上げられなかった、もっと別な形で年中行事、季節や一年の節目が、それぞれの集団に存在することをうかがわせるものもあるだろう。しかしながらその場合の年中行事は単なる私的な行事であつてはならず、たとえ共同体の崩壊によりかつてほどの強制力はないにしても、やはり流行を含めた別な意味での強制力が働くような社会的行事に限定される必要があるだろう⁽²⁶⁾。

私は、現在行われている年中行事を宗教学の上から捉えることがきわめて重要であると考えている。日本人における宗教のあり方は生活に密着したものであり、こうした様式の宗教を理解するためには年中行事の分析が不可欠であると考えている。そしてもう一言加えれば、年中行事を通じて現代都市民の宗教性を明らかにすることで、戦後の日本社会や文化の変動と現代日本社会の状況が明確に把握

できるものと考えられるのである。より詳細で広範囲の資料を収集することによって現状を把握することが緊急の課題である。

- (1) 日本におけるクリスマスの歴史と現状に関しては、拙稿「メリー・クリスマス」『春秋』一九九〇年一二月号および島崎征介「クリスマス」『大衆文化事典』弘文堂、一九九一年参照。
- (2) 日本における聖バレンタインデーの歴史と現状に関しては拙稿「マイ・ファニー・バレンタイン」『春秋』一九九一年二・三月号参照。
- (3) 堤江実『実践ギフトマーケティング』日本経済新聞社、一九九〇年、櫻井秀勲編著『ギフト・アイデア情報源』サンマーク出版、一九八八年、電通マーケティング戦略研究所編「贈る心」のマーケティング」日本経済新聞社、一九八七年参照。
- (4) ハロウィン、サンジョルディの日、ラブ・スターズ・デー等に関しては拙稿「ビスケットでハロウィン・パーティーをー」『春秋』一九九一年一・二月号参照。
- (5) 柳田國男「年中行事覚書」『定本柳田國男集』第十三巻、筑摩書房、一九六九年、折口信夫「年中行事」『折口信夫全集』第十五巻、中央公論社、一九五五年、和歌森太郎「年中行事」至文堂、一九五七年、『日本民俗学大系7 生活と民俗Ⅱ』平凡社、一九五九年、『日本民俗文化大系9 暦と祭事—日本人の季節感覚』小学館、一九八四年等参照。
- (6) 民俗学においても年中行事の変容が無視されているわけではない。江戸という大都市における歳時を分析した宮田登（『江戸歳時記』吉川弘文館、一九八一年）、年中行事と生活暦を扱った倉石忠彦（『都市民俗論序説』雄山閣、一九九〇年）、金沢を中心に都市のフォークカルチャーを考察している小林忠雄（『都市民俗学 都市のFOLK SOCIETY』名著出版、一九九〇年）らの業績があり、それぞれ貴重な指摘を

行っているが、クリスマスやバレンタインなどをはじめとして現在都市を中心に行われている年中行事の分析が含まれていないことに不満を覚える。

(7) たとえば、国立統計数理研究所による「日本人の国民性」調査の結果（一九八八年）によると、「信仰を持っている」者の割合は三十一％である。

(8) 井門富二夫「日本の宗教事情 総論」井門富二夫・吉田光邦編『日本人の宗教』淡交社、一九七〇年参照。

(9) NHK放送世論調査所編『日本人の宗教意識』（三三頁）。同書では実施率の高さから「初詣」を圧倒的多数が行う「国民的行事」、「お盆の墓参り」を「第一級の国民的行動」としている。

(10) 「日本人と宗教」柳川啓一・阿部美哉編『宗教理論と宗教史』放送大学教育振興会、一九八五年。同書では、花祭りやお盆は仏教と縁の深い行事、成人式や七五三は主に神社と関わり、七夕や中秋節は中国から伝えられた行事、聖バレンタインデーやクリスマスはキリスト教と関係が深いとしている（同書二二頁）。

(11) 宮家準「一年のリズム」『生活の中の宗教』日本放送出版協会、一九八〇年、あるいは「儀礼の構造分析例——日本の民俗宗教の儀礼の構造」『宗教民俗学』東京大学出版会、一九八九年参照。

(12) 中田実他編『リーディングス日本の社会学6 農村』東京大学出版会、一九八六年、祖父江孝男編『日本人はどう変わったのか——戦後から現代へ』日本放送出版協会、一九八七年、高度経済成長を考える会編『高度成長と日本人 Part 3 社会編 列島の営みと風景』日本エディタースクール出版部、一九八六年参照。

(13) 前注の他に、高度経済成長を考える会編『高度成長と日本人 Part 1 個人編 誕生から死までの物語』日本エディタースクール出版部、一九八五年、同編『高度成長と日本人 Part 2 家庭編 家族の生活の物語』日本エディタースクール出版部、一九八五年、作田啓一『価値の社会学』岩波書店、一九七三年、

加藤哲郎「戦後意識の変貌」岩波ブックレットシリーズ昭和史14、岩波書店、一九八九年、NHK世論調査部編「現代日本人の意識構造 第三版」日本放送出版協会、一九九一年、NHK放送世論調査所編「図説戦後世論史」日本放送出版協会、一九八二年、経済企画庁国民生活局編「国民生活を変える新たな主役たち」一九九一年参照。

(14) 島部を除く東京都の二〇歳以上の男女個人三〇〇〇人に対して個別面談法により行われた調査。回答者数は二一〇四人、回答率は七〇・一％であった。

(15) 東京都北区が北区在住の一八歳以上の一三〇〇人に対して郵送法により行った調査。回答者数は九〇五人、回答率は六九・六％であった。

(16) 東京都都在住（島部を除く）の二〇歳以上の三〇〇〇人に対して個別面談法により行われた調査。回答者数は二〇九四人、回答率は六九・八％であった。

(17) これら高い支持のもとに広く行われている七行事は、全国的な調査においても、高い実施率を示している。読売新聞が一九七八年七月に行った全国世論調査と、NHK放送世論調査所編「日本人の宗教意識」の調査結果は次のようになっている。

読売新聞全国世論調査

初もうで

六四・三

節分の豆まき

五六・九

ひな祭り、端午の節句

四一・四

七夕飾り

二二・二

お盆、お彼岸の墓参り

八三・七

七五三

クリスマス

その他

二七・三

五一・一

二・二

「日本人の宗教意識」(NHK)

初詣

よくする

することがある

しない

わからない・無回答

節分の豆まき

よくする

することがある

しない

わからない・無回答

お盆やお彼岸の墓参り

よくする

することがある

しない

わからない・無回答

五四・二

二六・七

一八・九

〇・二

五五・八

一八・七

二五・四

〇・一

六八・五

二〇・〇

一一・三

〇・二

お月見

よくする

二五・三

することがある

二三・〇

しない

五一・六

わからない・無回答

〇・一

クリスマス・ケーキ

よくする

六五・四

することがある

一八・二

しない

一六・二

わからない・無回答

〇・一

家族の誕生日のお祝い

よくする

五五・七

することがある

二七・二

しない

一七・〇

わからない・無回答

〇・二

- (18) なお年中行事の項目は民俗学で日本人の年中行事として取り上げるものに、若者が行っていると思われるたバレンタインデー、ホワイトデー、イースター、母の日、ハロウィン、クリスマスの六行事を加えて三五行事とした。詳しい調査結果については拙稿「移りかわる年中行事」『春秋』一九九一年五月号参照。
- (19) 「七五三」「ひなまつり」「ホワイトデー」「端午の節句」「七夕」の五行事は、実施率は五割を切るもの

の、「かつてやった」ことのある割合が高く、行事と年齢の関係を考慮すると、現在行われている行事の中に含めてもよいだろうと思われる。そうすると、大正月（正月）をはじめとした実施率の高い八行事と、年齢と関係の深い五行事を合わせた一三行事が、現代の若者の中で「生きている」行事ではないかと考えられる。

(20) いまひとつ、調査からは性別による実施率の相違が明らかになっている。現在行われている年中行事の実施率を男女別に見ると、すべて女性の実施率が男性のそれを上回っている。

(21) 田中宣一「年中行事の構造」『日本民俗文化大系』9 暦と祭事——日本人の季節感覚——小学館、一九八四年、一一一頁。

(22) 全国二〇歳以上の二〇〇〇人に対して実施された世論調査。回答者数一四六八人、回答率七三・四％であった。

(23) 一九八九年一二月実施、全国二〇歳以上の三〇〇〇人を対象に行われ、回答者数二三三五人、回答率七四・五％であった。

(24) 現代の正月の意味に関しては拙稿「はやくこいこいお正月」『春秋』一九九一年一月号、「今どきのお正月」『春秋』一九九二年一月号参照。

(25) 全国の著名神社の初詣者数の分析に関しては拙稿「初詣の実態研究序論——戦後の神社神道の変容の解明に向けて」『明治聖徳記念学紀要』復刊第一号、一九八八年参照。

(26) いまひとつ、重要な点として女性の年中行事への積極的関与を指摘することができる。「クリスマス」や「バレンタイン」は女性中心の行事といっているであろうし、私が行ったアンケート調査においても、年中行事全般への女性の積極的関与が目立った。これまで共同体での年中行事の中心的遂行者はもっぱら男性であったことを考えると、興味深い点である。